

小川和男先生と馬場克三先生

商学部長 中川 誠 士

小川和男先生（1903—1998）は、1941（昭和16）年10月に商業英語（コレスポネンス）・貿易実務担当教授として福岡高等商業学校に着任された後、本学が九州経済専門学校、福岡経済専門学校、福岡商科大学、福岡大学と変遷を遂げる中で、34年6ヶ月在職された商学部教員の先達である。商学部第二部が平和台に立地し毎年の入学者が500名を超えていた頃には、7年間（1963—1970）にわたり第二部主事を務められ、第二部の発展に貢献されている。筆者が先生のことを知りえたのは、第二部主事を仰せつかった任期中に商学部創立75周年記念式典に巡り合わせ、その準備との関連で『福岡大学50年史』の頁をばらばらと捲っていた時に、次のような第二部学生に向けた先生の文章が偶々目に留まり、感銘を受けたことによる。

「……職業と学業とをいかに調和両立させていくか、これがこれから4年間の最も大きな課題である。職業と学業の一人二役、しかも疲労と戦う一人二役これをいかにして果たすか、私には良策はない。しかし、……職業の如何を問わず、その研鑽を怠ったら廃物にならないまでも時代遅れになる。その意味で全ての人は直接の職務の遂行と同時に、新知識技能の吸収という一人二役を兼ねているのである。」（『福岡大学50年史』、730頁。）

筆者はこれを、第二部学生に対する温かい激励であるとともに、筆者自身にとっての貴重な教訓として読んだ。その後、先生の文章をもっと読んでみたいと思いつつ叶わなかったのであるが、思いがけず『福岡大学大学史資料集 第三集』として先生の書かれた日記（1941～1948年に執筆分）が刊行されるに及んで、その渴を癒すことができた。

この『小川和男日記』は、校訂に当たられた藤本俊史氏による行き届いた「解題」に述べられているように、大学史研究の観点と社会経済史的観点から

して意味深いものであると同時に、学校の統廃合問題や戦前・戦中・戦後の教員生活等の草創期の福岡大学をめぐる諸相がユーモアとアイロニーを含んだ名文によって活写されており、読んでいて実に面白い。ここではサワリの部分だけを紹介してみたい。

小川先生は、英語教員として岡山県第二中学校に12年勤めて教頭になられた37歳の時、「大校長になるか、語学のヴェテランになるか」人生の分かれ目という心境に達せられ、結局福岡高商への転職を決断されたのであるが、転職された昭和16年の12月に太平洋戦争が始まり、戦時体制が強まるにつれて先生が期待されたような研究者としての生活は半年も続かなかった。以後、日記では、学校業務に精勤されながらも食料の確保のために自宅の畑での作業に苦勞されている様子が多く記述されるようになる。「1943年4月20日 キャベツを植えたら隣の鶏が坊主にする程食べる。先日も柵を拵えたがまだ不十分なので入る。」「1944年4月16日 便所の蓋を明けて肥壺より汲出して畑にやる。生まれて初めての経験なり。」

しかしながら、食料事情が本格的に悪化したのはむしろ戦後の2年間で、自宅とともに学校の運動場での畑作業、経済警察の監視を掻い潜っての買い出し、GHQ配下の民間検閲局における日曜返上でのアルバイト等で必死にご家族の生活を守られる様子が記述されている。「1945年8月18日 運動場をこの間から掘起しているのを続ける。約89坪出来た。大根、蕪等をまく予定なり。」「1946年8月8日 馬糞を自転車に積んで、且途中に落ちているのを拾いつつ持参して甘藷にやる。」「1946年9月11日 小使が学校から手紙を持参してきた。『小川先生の諸は全部盗難にかゝり…』とある。こんなことなら全部早掘したらよかった。」「1946年10月11日 授業が終わると疲労して居たのを我慢して肥桶をかついで大

根の手入れ。」「日付不詳 まず生きていかなければ勉強も何も出来ないから仕方がないかとも思って肥桶をかついで居ます。」

先生の日記を拝読し敬服して止まないことは、満身に研究時間が確保できないことについての反省が記されない日が困難を窮めた生活の中にあっても殆どないことであり、研究時間を捻出する努力を最後まで放棄されていないことである。本来先生の御専門は英文学で、商業英語と貿易実務の講義ノートは、このような状況の下で努力の末作成されたものであった。冒頭に引用した第二部学生向けの先生の文章も、先生のこのような体験と努力に裏打ちされたものであったのである。

日記では、当時の学生気質についての記述も興味深い。小川先生は、最初は福岡高商の学生の勉強ぶりに相当期待されていたようであるが、段々と不満が募ってくる様子が伺える。「1941年12月17日 採点。私立学校だがやはり選抜されて居るので出来は良し。勉強して居らぬ者殆どなし。二中学生の答案見るより愉快。」「1942年3月10日 一気に答案を見る気で居たが不出来にてサッパリ乗り気せず。もっと出来る生徒たる事を前提として居りたるが誤りなり。」「1943年3月17日 忙しいのに引切りなしに不良成績の生徒が『どうでしょうか』とか『点をよろしく付けてくれ』とか来る。昨日来11名が来て実にうるさし。しまい腹を立てる。職務執行妨害罪だ。」今の商学部学生をご覧になったら、先生は何と仰るであろうか。

ところで、2013年の商学部第二部創立60周年を控えて、記念行事の挨拶のネタを探そうと思い、改めて『小川和男日記』を熟読してみたとき、新たに発見したことがあった。それは、日記中の随所で言及されている「馬場」なる人物が、馬場克三先生(1905—1991)であったことである。馬場克三先生は個別資本説という独自の学説を打ち立てた戦後日本を代表する経営学者の一人(Cf., Witzel, Morgan, *The Biographical Dictionary of Management*, Vol. 1, Thoemmes Press, 2001, pp.40-41.)である。私事で恐縮であるが、筆者が大学院で学んだ先生方は全て馬場先生の薫陶を受けておられ、特に筆者が福岡大学に奉職するに当たり大変お世話になった故片山伍一先生(福岡大学教授、九州大学名誉教授)は馬場先生の直弟子に

当たる。従って、筆者にとって馬場先生は、遠くに仰ぎ見るほかない学問上の峻嶺であり続けている。(なお、馬場先生の学説については、経営学史学会監修『経営学史叢書第XIV巻 日本の経営学説II』文眞堂、2013年、に一章を寄稿したので、併せて御笑覧頂ければ幸いである。)

あの馬場先生と小川先生がご親戚(おそらく従兄弟)同士であることが、日記を熟読して判明したのである。そもそも、小川先生の転職は、九州帝国大学法文学部助教授であった馬場先生が、当時の福岡高商校長安部新氏に小川先生を推薦したことにより実現したことであった(馬場先生ご自身も、1945～1953年に、九州経専、福岡経専、福岡商大において、経営経済学を講じられている)。日記からは、両家が深い親交を結び、困難な時代を助け合いながら生き抜いていかれた様子が伺える。1945年6月19日の福岡大空襲で自宅を焼失された馬場先生の御家族は、翌日焼失を免れた小川先生の家へ避難されている。

現在恵まれた環境を享受できていることを先人に感謝するとともに、それを教育と研究に活かし切る努力を続けなければならないと思う。『小川和男日記』を読むことにより、二人の尊敬すべき先生と筆者如きとの間にも関係の糸が結ばれていない訳ではないことを実感できたとともに、福岡大学商学部の歴史の末端に連らせて頂いていることの有難さと責任の大きさを改めて噛み締めた次第である。

